

「時間の経過」を表す「オクル(送)」の成立について

青 木 毅

目 次

- 一、問題の所在——「時間の経過」を表す「フ(経)」と「オクル(送)」——
- 二、「時間の経過」を表す「オクル(送)」の原義
- 三、「時間の経過」を表す「オクル(送)」の出自
- 四、まとめ

一、問題の所在——「時間の経過」を表す「フ(経)」と「オクル(送)」——

周知の如く、『将門記』には、院政初期書写の古写本として、真福寺蔵の承德三年(一〇九九)書写本と、楊守敬旧蔵の院政初期書写本との二本が現存している。その『将門記』古写本二本の同一本文部分において、次の如く、「時間の経過」を表す「フ(経)」と「オクル(送)」とが対応している箇所が認められる。

① 傳言昔燕丹事ツクムマヤ 於秦皇シ 遙送ル 久年シ 然後シ 燕丹請暇コト 歸古鄉ニ (真福寺本『将門記』100)

② 傳口昔燕丹事ニ 於秦皇シ 遙送ル 久年シ 然後シ 燕丹請暇コト 歸ニ 於古鄉ニ (楊守敬本『将門記』26)

同様の例は、『平家物語』の延慶本と寛一本との間、また、『今昔物語集』の本文とその出典文献(俊頼髓脳)との間に

「時間の経過」を表す「オクル(送)」の成立について

おいても指摘することができる。

③蘇武ハ片足ハ折レタレトモ十九年ノ星霜ヲ經テ古郷ヘ歸リ上シニ（延慶本『平家物語』第一末、一〇〇ウ2）

④十九年の星霜を送て、かた足はきられながら、輿にかゝれて古郷へぞ歸りける。（寛一本『平家物語』卷第二、蘇武）

⑤然テ、年来ヲ經ケル程ニ、宮ノ内ニ被打籠テ徒ニ年ヲ經ル女御、員数有ケリ。然^{モレド}天皇御覽スル事モ无ルヲ、天皇、「此等

憑テ徒ニ年ヲ送ル、極テ糸惜□。小々ヲバ祖々ニ返シテ男ニモ嫁ト仰セ給テ、小々返シ給リ。」（今昔物語

集』卷第十、第八）

⑥さて年月をふる程に、かの宮の内のうちこめられていたづらに年を送る女、このかずあまりつもりぬれば、いとほし、我をたのみていたづらに年を送る、いとほしき事なりとて、せうくをばおのく親に返してをとこをもせさせむとて返し給ひけり。（『俊頼髓腦』二二〇頁）

（用例⑤⑥における棒線部分と点線部分とは、文脈上同一の内容を指示していると見られる）

これらは、いずれも、同一の文脈において「時間の経過」を表す「フ」と「オクル」とが使用されている例であり、したがって、両者（「フ」と「オクル」）は、少なくとも「時間の経過」を表す文脈においては、極めて近い意味を表し得る関係にあると言えるのではないかと思う。

また、次のように、日本漢詩（久遠寺蔵『本朝文粹』）における対句の対応部分であって、しかも類似した文脈において「フ」と「オクル」とが用いられた用例も認められるのであって、⁽⁵⁾こういった例も、右のことを裏付ける一つの傍証となり得るのではないかと思われる。

⑦天元三年・遷^{ウツル}大藏丞・永觀二年・適^{タマク}預榮爵・諸司之間・經^ル十一年・榮爵之後・送^{スル}十三年。（久遠寺蔵『本朝文粹』卷第六、江以言、爲宮道義行申安房能登淡路等守状）

さて、このように「フ」と「オクル」とが「時間の経過」を表す文脈において、極めて近い意味を表し得る用語であ

ることを確認した上で、次に、奈良・平安時代（院政期を含む）における両者の出現状況を文章ジャンル毎に見てみると、次の表①から表⑦の如くなる。⁶⁾（表①—奈良時代語文獻、表②—平安時代語文獻）

（表①）

文 献 名	フ	オクル
（金石文）		
法華義疏	4	
古事記	7	
日本書紀	44	
風土記	8	
懷風藻	1	1
（寧楽遺文）	72	1
（上代歌謡）	3	
万葉集	81	
合 計	220	2

（表②）和歌

文 献 名	フ	オクル
古今和歌集	34	
後撰和歌集	65	
拾遺和歌集	45	1
後拾遺和歌集	50	1
金葉和歌集	16	
詞花和歌集	12	
千載和歌集	36	2
新古今和歌集	50	2
合 計	308	6

『時間の経過』を表す「オクル（送）」の成立について

(表③)物語・日記・随筆

11		10c										
和泉式部日記	源氏物語	枕草子	落窪物語	宇津保物語	蜻蛉日記	多武峯少将物語	平中物語	大和物語	土左日記	伊勢物語	竹取物語	文献名
8	193	6	7	108	39	7	10	18	10	23	5	フ
	1	1 [△]										オクル

12											
合計	とりかへばや物語	堤中納言物語	大鏡	栄花物語	讃岐典侍日記	狭衣物語	篁物語	浜松中納言物語	更級日記	夜の寝覚	紫式部日記
562	7	2	12	13	5	32	2	24	2	26	3
6				2		1				1	

「時間の経過」を表す「オクル」の成立について

	12					11			10c		
合計	御二条師通記	帥記	水左記	春記	左経記	御堂関白記	権記	小右記	九曆	貞信公記	文献名
151	9	4	4	18	24	1	14	68	9		フ
11		1		1		2	1	6			オクル

(表④)古記録

	13		12		11c		
合計	釈氏往来	菅丞相往来	東山往来	高山寺本古往来	和泉往来	雲州往来	文献名
9	1	1	5	2			フ
12	2	2		4	2	2	オクル

(表⑤)古往来

(表⑥)伝記

	12	11	10	9c	
文 献 名					フ オクル
浦島子伝					
続浦島子伝			3	2	
将門記			4	1	
日本往生極楽記			7	1	
法華験記		66		13	
玉造小町壮衰書				4	
拾遺往生伝		32		10	
後拾遺往生伝	12			3	
合 計	124			34	

(注記) 一、「フ」「オクル」共に、時間の経過を表現していると思われる用例のみを対象として、表を作成した。

一、漢字文献の場合、「経」「歴」「逕」字を「フ」、「送」字を「オクル」として(7)用例を採取し、数値を示した。

一、「枕草子」における「オクル」の一例は、本文に問題の存する箇所用例である(8)。

(表⑦)漢詩文

	12	11	10	9c	
文 献 名					フ オクル
凌雲新集				1	
文華秀麗集			4	1	
経国集			10	1	
菅家文章			1	11	
菅家後集				1	
本朝文粹		19		20	
朝野群載		33		16	
本朝統文粹	4			14	
合 計	72			64	

これらの表を参看すると、「フ」と「オクル」との出現状況には、少なくとも次の二点において大きな差異が認められるようである。

1、「フ」は、奈良・平安・院政期の各時代を通じて一般に認められるのに対して、「オクル」は、奈良時代において

はほとんど見出されず、平安時代になつて漸く、比較的広い範囲の文献において認められるようになる(時代差)。2、「フ」は、さほど文章ジャンルによる偏りもなく広く認められるのに対して、「オクル」は、平安時代においても和文資料にはなお見出し難く、漢文資料の方に集中して出現している(位相差)。

このように、時間の経過を表す「オクル」は、「フ」に比べて、その出現状況に著しい偏り(時代差・位相差)が認められるのである。

右のような出現状況の偏りは、「オクル」という動詞が有している性質(意味的・文体的特徴等)の一面が表れた結果であらうと想像される。本稿では、以上のような問題点をふまえ、「オクル」が、時間の経過を表す動詞としてどのような性質を有しているかという点を追求してみたいと思う。

二、時間の経過を表す「オクル(送)」の原義

一において見たように、時間の経過を表す「オクル」は、奈良時代においては通例見出し難い用語であつたようである。しかしながら、「オクル」という動詞には、出立する人に付き添つて行く、または見送るといった意味を表すものも一方で存しているのであつて、こちらについては、例えば『万葉集』などに、次の如く見出される。

⑧草枕旅行く君を荒津まで送りそ來ぬる(送來) 飽き足らねこそ(『万葉集』卷第十二、三二二六)

⑨吾妹子がわれを送ると(吾呼送跡) 白袴の袖漬つまでに泣きし思ほゆ(『万葉集』卷第十一、二五一八)

本項では、こうした意味を表す「オクル」(A類とする)と、時間の経過を表す「オクル」(B類とする)とが、何らかの関係を有しているのかどうか、有しているとすればそれはどのような関係であるのかという点について検討を加えることとする。

なお、『邦訳日葡辞書』においては、A類の「オクル」とB類の「オクル」とは同一の項目に掲出しているが、前者を時間の経過を表す「オクル(送)」の成立について

「行く人に付き添ひて行く」意、後者を「時を過ぐす」意としてあり、別々の意味項目として扱わねばならぬ。

㊤ Vocuri, uru¹ utta. フクリ, ル, ッタ (送り, る, つた) つぐなう, 報いる。 ㊦ Vonno vocuru. (恩を送る) 恩徳に報いる。 ㊧ Togaño vocuru. (料を送る) 罪科に対するつぐないをする。 ㊨ また、行く人に付き添ひて行く。 例, Fitono vocuru. (人を送る) ㊩ また、進物とか書状とかを送る。 例, Zaxxóño vocuru. (雜餉を送る) 肴 (Sacanas) と酒との贈物を送る。 ㊪ Furnio vocuru. (文を送る) 書状を送つてやる。 ㊫ また、埋葬する、または、葬式を行なう。 例, Xigaino vocuru. (死骸を送る) 死体を埋葬する、または、墓穴の所まで死体に付き添ひて行く。 ㊬ また、時を過ぐす。 ㊭ Toxi, tquqi, fino vocuru. (年, 月, 日を送る) 年, 月, 日を過ぐす。 ※ 1) ru とあるべきもの。

(『邦訳日葡辞書』Ⅷ)

さて、今回の調査において見出し得た「時間の経過」を表す「オクル」の初出例は、『懷風藻』に認められた次の用例である。

① 神居深亦靜。勝地寂復幽。雲卷三舟谷。霞開八石洲。葉黃初送夏。桂白早迎秋。今日夢淵上。遺響千年流。(『懷風藻』)

正五位下圖書頭吉田連宜。二首。五言。從駕吉野宮。一首。)

この例では、「葉黃初送夏」と「桂白早迎秋」とが対句を成していると考えられ、したがって「送夏」に対しては「迎秋」が対応していると思われる。このように「送(オクル)」と「迎(ムカフ)」とが対になっている(つまり、「送(オクル)」と「迎(ムカフ)」とが対義の関係になっていると思われる)ことから考えると、この場合の「送夏」とは、「夏」という季節を過ぐす」という意を表しているのではなく、むしろ「夏」という季節が去り行くのを見送る」という意を表しているものと解釈されよう。

すなわち、この用例の場合、「送夏」という表現全体としては、「夏の経過」を表しているものの、「送(オクル)」という動詞自体は、A類の意味を担っていると考えられるのである。その類例は、以後の文献においても、次の如くなお見

出される。

⑫ かぞふればわが身につもる年月を送り迎ふとなにいそぐらん（『拾遺和歌集』卷第四・冬・二六一）

⑬ ゆふひさすそののすきかたよりにまねくやあきをおくるなるらん（『後拾遺和歌集』第五秋下・三七二）

⑭ 旬月早送時尅稍迎（高野山西南院藏『和泉往来』145）

⑮ 厥聞鳥喧則疑例敵之噓・見草動則驚注人之來・乍嗟・運多月・乍憂・送數日（真福寺本『將門記』231）

⑯ 送春蕃棘珊瑚色。迎夏巖苔玳瑁斑。避暑追風長松下。提琴搗茗老梧間。（『文華秀麗集』夏日左大將軍藤原朝臣閑院納涼。

探得閑字。應製。）

⑰ 春送客行客送春 傷懷四十二年人（菅家文章『卷第三・188、中途送春』）

用例⑭⑯は、先掲の『懷風藻』の用例（⑩）の場合と同様の考え方が成り立つように思われる。

また、用例⑫は、「迎ふ」という動詞を後部要素に持ついわゆる複合動詞として用いられている例であり、その意味内容としては、年月が去り行くのを見送り、やってくるのを迎えるの如くであろうと考えられるので、この場合も、やはり、用例⑩と同様の考え方が成り立つように思われる。

用例⑬は、「まねく」と「おくる」とが意味的に対比されていると見られることから、全体の歌意としては、秋の暮の夕暮に染まるすずきがひたすらに招いていることよ、惜しみながら秋を見送っているのだろうの如く解釈されよう。すなわち、「オクル」という動詞自体は、A類の意味を担っていると考えるのが妥当であろうと思われる。

用例⑮は、「ムカフ」と対を成している用例⑭⑯の場合ほど、明確に判別できる例ではないが、「運（ハコブ）」と「送（オクル）」とが類義の関係として対を成していると見られることから、「オクル」自体は、やはり、A類の意味を担っていると考えられよう。

用例⑰は、「春」が「客」を「送（オクル）」のと同時に「客」も「春」を「送（オクル）」というわけであるから、これ

ら二つの「送(オクル)」は、同一の意味を表していると考えられ、したがって、「送春」の場合も、「送客」と同様、A類の意味を担っているものと判断される。

以上の用例は、要するに、「人が出立するのを見送る」意を表すA類の「オクル」を、主体を「時間」に置き換えて用いることにより、「時間が去り行くのを見送る」といつたいわば比喩(擬人法)的な意味で、「時間の経過」を表しているものと解される。

すなわち、「時間の経過」を表すB類の「オクル」は、元来、A類の「オクル」の比喩的用法であったと考えられ、その意味で、両者は、本来的には同一の動詞であったと見做すことができよう。したがって、「オクル」という動詞自体に「時を過ごす」という意味が存していると考えられるようになったのは後世のことであって、もともとはそのような意味は存していなかったと考えるのが自然であり、また、その可能性が高いように思われる。

なお、いつごろから「オクル」という動詞自体に「時を過ごす」という意味が存していると考えられるようになったかという点については、明らかにその意味と判別できる用例が極めて少ないため、確かなことは述べ得ない。ただし、本稿の冒頭に掲げた楊守敬旧蔵本『将門記』の用例②などは、当時「フ(経)」と置換可能であったらしいという点などから判断して、「オクル」自体が「時を過ごす」という意味を表した用例として認めることができるかも知れない。だとすれば、院政期にはすでに、その意味が成立していたと考えることも可能であろう。

三、「時間の経過」を表す「オクル(送)」の出自

二での検討により、「時間の経過」を表す「オクル」(B類)は、「人が出立するのを見送る」といった意味を有する「オクル」(A類)の比喩(擬人法)的用法(時が去り行くのを見送る)、もしくは、それが意味変化した結果生じた派生義(「時を過ごす」として捉えるべきものであろうと考えられた。すなわち、A類の「オクル」が先ず存在し、後に、B類の「オ

クル」がそこから派生的に生じたと考えられるわけである。

さて、一において見たように、『時間の経過』を表す「オクル」(A類の「オクル」の比喩的用法を含む)は、奈良時代においては通例見出し難く、平安時代においても和文資料にはなお見出し難い用語であつたようである。とすれば、『時間の経過』を表す「オクル」は、我が国における独自の用法、すなわち大和言葉として本来的に存在していた用法であるとは考えにくいように思われてくる。

それでは、これまで見てきたような『時間の経過』を表す「オクル」は、どこにその出自を求めることができるのであろうか。

今、ここに、この問題の解明の糸口となり得ると思われる興味深い事実を指摘することができる。次の用例は、『源氏物語』において唯一見出される『時間の経過』を表す「オクル」の例である。⁽¹⁰⁾

⑩けふのしくれつねよりことにかなるをあそひなとすましましかたにていとつれ／＼なるをいたつらに日を送る
たはふれにてこれなんよかるへきとて碁はんめしいて、御碁のかたきにめしよす(『源氏物語』やとり木、一七〇四⑩)
この例は、女二宮の婿に薫をと考えている今上が、そのことを薫にそれとなく伝える機会を得ようとして、碁の相手を薫に命ずる詞の中に見出されるものである。この箇所は、古来より『白氏文集』の一節を踏まえていると考えられてきたところであつて、例えば、室町時代の『源氏物語』古注の一つである一条兼良の『花鳥餘情(松永本)』⁽¹¹⁾には、次の如く記されている。

⑪女二宮は母女御の御思のおりふしなれば物のねなとはすましましくにあはぬゆへに御碁をとおほしめすなり 文集十
六云送日唯有酒銷日不過碁^(卷)云々 此詩の心をとりていたつらに日ををくるこれなんよかるへきといへり(松永本『花鳥餘情』卷二十七、宿木)

右の説の適否については、なお慎重を要するかと思われるが、少なくとも、『源氏物語』における『時間の経過』を表

す「オクル」の唯一の用例の存する箇所が、『白氏文集』の一節を踏まえていると考えられている所であるという事実は、極めて示唆的である。すなわち、このことから、「時間の経過」を表す「オクル」の出自は、中国の漢文に求められるのではないかと予想されてくるのである。

そこで、次に、中国文献（漢文乃至漢文訓読文）に、「オクル」と訓読し得るところの「時間の経過」を表す「送」字が見出されるか否かを調査することとする。⁽¹³⁾

まず、仏書については、日本に伝存する平安時代の仏書訓点資料を調査したのであるが、今回の調査では、「時間の経過」を表していると思われる「送（オクル）」は、一例も見出すことができなかった。

(表⑧)

初期		中			後	
文 献 名	経(フ)	送(オクル)				
小川本四分律	2					
西大寺本最勝王經	15					
玄奘法師表啓						
東大寺蔵十輪經	2					
法華經玄贊		4				
太子須陀拏經						
沙弥十戒威儀經						
西大寺本神呪心經		5				

院政								
合 計	南海寄帰内法伝	無量義經	龍光院蔵法華經	高山寺蔵大日経疏	興福寺本慈恩伝	前田本冥報記	八字文殊儀軌	石山寺蔵西域記
104	4	1	8	8	36	10	9	0

なお、「経(フ)」については、表⑧に見る如く、少なからずその使用例を見出し得たのであり、「送(オクル)」が見出されなかったことも、あなたが偶然ではなかったと言えるかも知れない。

cf. ⑳時(に)着婆董子從(ひ)て医術を学ブ。七年を経(已)りて、自(ら)念(じ)て言(は)く、(小川本『願経四分律』平安極初期点、甲巻、⑳13)

次に、漢籍のうち、散文資料として〈経書・史書〉の類を、韻文資料として〈漢詩・唐詩〉の類を調査してみた。⁽¹⁵⁾その結果、「時間の経過」を表していると思われる「送」字は、〈経書・史書〉の類には見出し得なかったのであるが、〈漢詩・唐詩〉の類には、次の如く、数多くの用例を見出すことができた。

㉑三月三十日。春歸日復暮。惆悵問_レ春風。明朝應_レ不_レ住。送_レ春曲江上。管管東西顧。(『白樂天詩集』卷十、送_レ春)

㉒職散優閒地。身慵老大時。送_レ春唯有_レ酒。銷_レ日不_レ過_レ某。祿米鹽牙稻。園蔬鴨脚葵。飽饗仍晏起。餘暇弄_レ龜兒。

龜兒即
小姪名 (『白樂天詩集』卷十六、官舍閒題)

㉓送_レ秋千里鴈。報_レ暝一聲猿。已_レ豁_レ煩襟悶。仍_レ開_レ病眼昏。郡中登眺處。無_レ勝_レ此東軒。(『白樂天詩後集』卷五、東樓南望八韻)

㉔仙家日月本長閒。送_レ臘迎_レ春亦偶然。翠管銀罍傳_レ故事。金花綵勝作_レ新年。(『蘇東坡詩集』卷四十六、皇太后閣六首)

㉕薄紅梅色冷。淺綠柳輕春。送_レ迎_レ交兩節。暄寒變_レ一辰。(高宗皇帝、守歲)

㉖白藏初送節。玄律始迎冬。林枯黃葉盡。水耗綠池空。(李嶠、十月奉教作)

㉗華表迎_レ千歲。幽扇送_レ百年。獨嗟流水引。長掩伯牙弦。(賈賓王、樂大夫挽詞五首)

㉘半卷寒簷幕。斜開暖閣門。迎_レ冬兼送老。只仰酒盈尊。(白居易、早寒)

㉙野酌亂無巡。送_レ君兼送春。明年春色至。莫作未歸人。(雍裕之、春晦送客一作二月晦日郊外送客)

「時間の経過」を表す「オクル(送)」の成立について

しかも、これらは、「送」字それ自体が、時を過ぐす」といった意味を表しているというよりは、むしろ、用例②④⑤⑥などに見る如く、^レ時が去り行くのを見送る^ルといった比喩(擬人法)的な意味で、^レ時間の経過^ヲを表していると認められるのである。このことは、次に示すように、『康熙字典』において、「送」字それ自体の字義として、^レ時間の経過^ニ関わる意味を掲出していないことから首肯されようかと思われる。

⑩〔唐韻〕〔集韻〕〔韻會〕〔正韻〕扶蘇弄切。音鬆。〔說文〕遣也。〔詩〕擗風遠送于野。〔禮〕田禮使者歸。則必拜送于門外。又〔增韻〕將也。〔儀禮〕聘禮。賓再拜稽首送幣。〔又〕公拜送禮。又〔正韻〕贈行曰送。〔詩〕秦風。我送舅氏。又株送罪人相牽引也。〔前漢〕食貨志。迺徵諸犯。令相引數千人。名株送徒。〔註〕先至者爲魁株。被牽引者。謂其根株所送也。又目送以目相送也。〔左傳〕桓元年。目逆而送之。〔史〕記留侯世家。四人趨出。上目送之。又縱送善射之貌。〔詩〕鄭風。抑縱送忌。〔朱註〕舍拔曰。縱。覆彌曰送。〔玉篇〕籀文作送。〔標註〕訂正康熙字典卷之十二、尾部、六画、「送」字の項

以上のことより、我が国における^レ時間の経過^ヲを表す「オクル」は、中国の韻文(漢詩・唐詩)の類)における「送」字の用法の影響を受けて発生したものと考えられるのではないだろうか。

右のことは、また、次の三つの事例によっても、裏付けることが可能であろうと思われる。

1、先掲の表①⑦によれば、我が国における^レ時間の経過^ヲを表す「オクル」は、漢詩文に最も多くの用例を認めることができる。

2、我が国において九世紀以前に認められる^レ時間の経過^ヲを表す「オクル」の用例を見ると、四例中三例が漢詩文において用いられている(表①⑦参照)。

3、今、我が国における「時間の経過」を表す「オクル」が目的語にとる語句を、文章ジャンル毎に見てみると（次掲の表⑨）（参照）、漢詩文の場合、他の文章ジャンルに比べて、〈春・夏・秋・冬〉の類と〈世・代・人生〉の類とが多くなっていることに気づかれよう。これは、中国の〈漢詩・唐詩〉の類に見出し得た「時間の経過」を表す「オクル」の大半が、右の二類に属する目的語をとっているのであって、その影響を受けた結果が表れているものと考えられる。

(表⑨)

文 献 名	〈春・夏・秋・冬〉の類	〈年・月・日〉の類	〈世・代・人生〉の類	〈程・頃・時〉の類
(金石文)				
法華義疏				
古事記				
日本書紀				
風土記				
懷風藻	夏(1)。			
(寧楽遺文)		日(1)。		
(上代歌謠)				
万葉集				

「時間の経過」を表す「オクル(送)」の成立について

(表⑩)和歌

	13	12	11	10c
文 献 名	新古今和歌集	千載和歌集 詞花和歌集	金葉和歌集 後拾遺和歌集	古今和歌集 後撰和歌集 拾遺和歌集
〈春・夏・秋・冬〉の類			秋(1)。	
〈年・月・日〉の類	年月(1)。	千歳(1)。		年月(1)。
〈世・代・人生〉の類				
〈程・頃・時〉の類	夜(1)。			
φ		1		φ

(表⑪)物語・日記・隨筆

	10c
文 献 名	竹取物語 伊勢物語 土左日記 大和物語 平中物語
〈春・夏・秋・冬〉の類	
〈年・月・日〉の類	
〈世・代・人生〉の類	
〈程・頃・時〉の類	
φ	

堤中納言物語	大鏡	栄花物語	讀岐典侍日記	狭衣物語	篁物語	浜松中納言物語	更級日記	夜の寢覚	紫式部日記	和泉式部日記	源氏物語	枕草子	落窪物語	宇津保物語	蜻蛉日記	多武峯少将物語
		年頃(1)。		年月(1)。							日(1)。					
		1						1				1 ^A				

『時間の経過』を表す「オクル(送)」の成立について

とりかへばや物語			
----------	--	--	--

(表⑫)古記録

文 献 名	〈春・夏・秋・冬〉の類	〈年月・日〉の類	〈世・代・人生〉の類	〈程・頃・時〉の類
貞信公記				
九 曆				
小右記	春秋(1)。	日(1)。永日(1)。数日(2)。日(1)。		
権記		日月(1)。		
御堂関白記		数日(1)。		数剋(1)。
左経記				
春記		数日(1)。		
水左記				
帥記		日月(1)。		
御二条師通記				

(表⑬)古往来

文 献 名	〈春・夏・秋・冬〉の類	〈年・月・日〉の類	〈世・代・人生〉の類	〈程・頃・時〉の類
雲州往来		数稔(1)。	余生(1)。	

11c

12

11

10c

和泉往来		年月(1)。旬月(1)。	
高山寺本古往来	春秋(1)。	歲月(1)。日者(1)。	一生間(1)。
東山往来			
菅丞相往来	日(1)。		夜(1)。
积氏往来	歳華(1)。		

(表14) 伝記

文 献 名	〈春・夏・秋・冬〉の類	〈年・月・日〉の類	〈世・代・人生〉の類	〈程・頃・時〉の類
浦島子伝				
続浦島子伝		万歳(1)。歳(1)。		
将門記		数日(1)。		
日本往生極楽記		余年(1)。		
法華験記		年序(1)。多年序(2)。 数百年(1)。年月(4)。 旬月(1)。日(1)。	世(1)。世間(1)。	昼夜(1)。
玉造小町壮衰書		年(1)。	生死海涯(1)。	時(1)。多時(1)。
拾遺往生伝		〽年(4)。〽日(2)。	余生(2)。余算(1)。	五更(1)。
後拾遺往生伝		年月(1)。〽年(1)。日数(1)。		

「時間の経過」を表す「オクル(送)」の成立について

(表15) 漢詩文

	9c	10	11	12
文献名	凌雲新集	菅家文章 菅家後集	本朝文粹	本朝統文粹 朝野群載
〈春・夏・秋・冬〉の類	春(1)。	春(2)。秋(1)。冬(1)。	春(1)。春秋(1)。秋(4)。千秋(1)。	秋(1)。千秋(1)。
〈年・月・日〉の類		日(2)。	年(1)。歳(1)。歳月(1)。数月(1)。日(3)。	年(1)。年序(1)。多年(2)。年(4)。歳(1)。年月(5)。
〈世・代・人生〉の類		我生(1)。老(2)。	老(1)。	余生(1)。残生(1)。
〈程・頃・時〉の類		五更(2)。	夜(1)。	夜(1)。
〈年・月・日〉の類		年(1)。	年(1)。年序(1)。多年(2)。年(4)。	年(1)。年序(1)。多年(2)。年(4)。
〈世・代・人生〉の類		我生(1)。老(2)。	老(1)。	余生(1)。残生(1)。
〈程・頃・時〉の類		五更(2)。	夜(1)。	夜(1)。

(注記) 一、右の四類に分類しきれなかった目的語としては、「炎涼」一例(釈氏往来)、「寒燠」一例(涼燠)、「居諸」各一例(本朝統文粹)、がある。
 一、φ印の欄に示した数値は、目的語が明示されない用例の数である。

このように見てくると、我が国における「時間の経過」を表す「オクル」は、中国の韻文、すなわち〈漢詩・唐詩〉の類にその出自が求められ、漢詩文の世界を通して我が国に伝えられたと考えられるように思われるのである。

四、まとめ

ここで、これまでの検討結果をまとめると、次の三箇条に整理できるように思われる。

1、*「時間の経過」*を表す「オクル(送)」は、奈良時代においては通例見出し難く、平安時代においても和文資料にはなお見出し難いことから、本来の大和言葉としては、存在していなかった用語(用法)ではないかと推測される。

2、*「時間の経過」*を表す「オクル(送)」は、もともと、『邦訳日葡辞書』の記述に見られるような*「時を過ごす」という意味を有していたわけではなく、むしろ「時が去り行くのを見送る」といったような比喻(擬人法)的な意味で、「時間の経過」を表していたものと考えられる。*

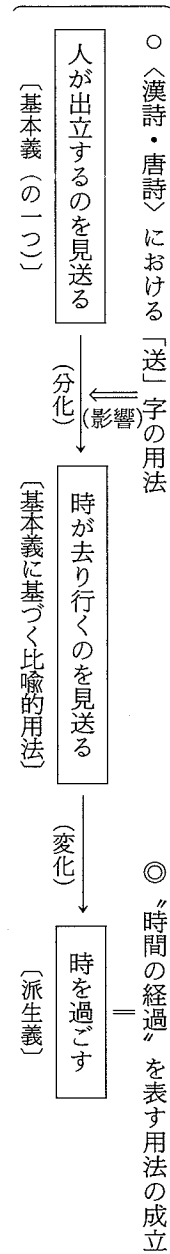
3、中国の*〈漢詩・唐詩〉*の類には、2のような比喻(擬人法)的な意味で*「時間の経過」*を表していると見られる「送」字の用例が、少なからず見出されることから、我が国における*「時間の経過」*を表す「オクル(送)」は、中国におけるこういった「送」字の用法の影響を受けて発生したものと考えられる。

すなわち、我が国における*「時間の経過」*を表す「オクル(送)」は、*〈漢詩・唐詩〉*を中心とする中国の韻文資料における「送」字の用法の影響を受けて、*「時が去り行くのを見送る」といったような比喻(擬人法)的な意味で用いられ始め、次第に、「オクル(送)」という動詞それ自体に「時を過ごす」という意味が存しているかのように考えられるようになったものと理解することができるように思われるのである。*

右のことを簡単に図示すれば、次の如くなるよう。

〔*「時間の経過」*を表す「オクル(送)」の成立過程〕

*「時間の経過」*を表す「オクル(送)」の成立について



右の結論がもし認められるならば、「時間の経過」を表す「オクル」は、いわゆる漢文訓読語に属する用語であるといふことになるかと思う。尤も、「オクル」という語形の方に注目すれば、

③①ことゝあかくなればさうしくちまでをくり給ふ〔源氏物語〕はゞき木、七二⑩

③②つとめて船に車かきすゑて渡して、あなたの岸に車引立てて、送りに來つる人々これより皆歸りぬ。〔更級日記〕10

の如く、和文においても一般に見出すことができるのであり、したがって、これまでの漢文訓読語に関する研究においては、別段取り上げられることもなかつたようである。しかしながら、言うまでもなく、語は、形態と意味とによつて成り立つ所の存在であつて、少なくとも一方が異なれば、厳密には、別語として扱われるべきはずのものである。このような考え方に従えば、「オクル」という動詞についても、「時間の経過」を表すものについては、漢文訓読語と認められてしかるべきであると思うのである。

したがって、今後、漢文訓読語、和文語、記録語といった位相による語彙の相違の問題を扱う際には、語形のみならず、意味・用法、もしくは、共起する語(動詞の場合なら、主語や目的語)との関係をも視野に入れて論ずる必要があるのではないかと思われるのである。⁽¹⁷⁾

以上、本稿では、「時間の経過」を表す「オクル(送)」という動詞を取り上げ、その原義と出自とを追求することによ

つて、その成立過程の一端を明らかにし、その検討結果から、語の意味・用法と言語の位相との関係の問題についても、いささか論及した。

なお、「フ(経)」や「スグス(過)」といった「時間の経過」を表す他の類義動詞との関係等、残された問題点も少なくはないが、それらは、すべて、今後の課題としたい。

注

- (1) テキストは、それぞれ、古典保存会編(真福寺本)、貴重古典籍刊行会編(楊守敬旧蔵本)の影印本を用いた。
- (2) ここで言う「時間の経過」を表す「フ(経)」「オクル(送)」とは、「年」「春」「剋」といったようなある時間的幅を表す名詞を目的語にとり、それが「移り行く」あるいは「過ぎ去る」ことを表すものを指す。
- (3) テキストは、それぞれ、汲古書院刊行の影印本(延慶本)と、岩波日本古典文学大系本(寛一本)とを用いた。
- (4) テキストは、それぞれ、岩波日本古典文学大系本(『今昔物語集』)と、日本歌学大系本(『俊頼髓脳』)とを用いた。
- (5) テキストは、汲古書院刊行の影印本(久遠寺蔵本)を用いた。
- (6) テキストは、以下のものを用いた。

〔奈良時代語文獻〕○金石文——勉誠社文庫1『古京遺文』(昭43、勉誠社)○法華義疏——中田祝夫『古点本の国語学的研究(訳文篇)』(昭29、勉誠社)○古事記——高木市之助・富山民蔵『古事記大成(索引篇)』(昭33、平凡社)○日本書紀——中村啓信『日本書紀総索引(漢字語彙篇)』(昭39、43、角川書店)○風土記・懷風藻——岩波日本古典文学大系2・69○寧楽遺文——竹内理三『寧楽遺文』(昭37、東京堂出版)○上代歌謡・万葉集——岩波日本古典文学大系3・4、7

〔平安時代語文獻〕(和歌)○古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集・新古今和歌集——新編国歌大観第一巻、勅撰集編(物語・日記・隨筆)○竹取物語——上坂信男『九本竹取翁物語語彙索引(本文編)』(昭55、笠間書院)○土左日記——小久保崇明・山田瑩徹『土左日記本文及び語彙索引』(昭56、笠間書院)○平中物語——曾田文雄『平中物語(研究と索引)』(昭60、溪水社)○多武峯少将物語——小久保崇明『多武峯少将物語本文及び総索引』(昭47、笠間書院)○蜻蛉日記——佐伯梅友・伊牟田経久『改訂新版かげろふ日記総索引(本文篇)』(昭56、風間書房)○宇津保物語——宇津保物語研究会『宇津保物語本文と索引(本文編)』(昭48、笠間書院)○枕草子——田中重太郎『校本枕冊子(上

「時間の経過」を表す「オクル(送)」の成立について

巻・下巻』(昭28、31、古典文庫) ○源氏物語——池田亀鑑『源氏物語大成第一〜三巻(校異篇)』(昭28〜29、中央公論社)
 ○和泉式部日記——東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『和泉式部日記総索引(本文篇)』(昭34、武蔵野書院) ○紫式部日記——岩波文庫62『紫式部日記』(昭5、岩波書店) ○更級日記——東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『更級日記総索引(本文篇)』(昭31、武蔵野書院) ○篁物語——小久保崇明『篁物語校本及び総索引』(昭45、笠間書院) ○讀岐典侍日記——今小路寛瑞・三谷幸子『校本讀岐典侍日記』(昭42、初音書房) ○大鏡——秋葉安太郎『大鏡の研究(本文篇)』(昭36、桜楓社出版) ○とりかへばや物語——鈴木弘道『とりかへばや物語の研究(校注編)』(昭48、笠間書院) ○伊勢物語・大和物語・落窪物語・夜の寝寛・浜松中納言物語・狭衣物語・栄花物語・堤中納言物語——岩波日本古典文学大系(古記録) ○貞信公記・九曆・小右記・御堂閔白記・御二条師通記——大日本古記録○権記・左経記・春記・水左記・帥記——史料大成(古往来) ○雲州往来——三保忠夫・三保サト子『雲州往来享禄本研究と総索引(本文・研究篇)』(昭57、和泉書院) ○和泉往来——京都大学国語国文資料叢書28『和泉往来(高野山西南院蔵)』(昭56、臨川書店) ○高山寺本古往来——高山寺資料叢書第二冊『高山寺本古往来 表白集』(昭47、東京大学出版会) ○東山往来・菅丞相往来・釈氏往来——日本教科書大系第一・二巻、古往来(一)(二)(伝記) ○浦島子伝・続浦島子伝——重松明久(古典文庫55)『浦島子伝』(昭56、現代思潮社) ○将門記(真福寺本)——注(1)文獻○日本往生極楽記 法華験記・拾遺往生伝・後拾遺往生伝——岩波日本思想大系7 ○玉造小町壮衰書(東京大学本)——山内潤三・木村晟・枋尾武『玉造小町壮衰書』(昭56、笠間書院) (漢詩文) ○凌雲新集・経国集——群書類従8 ○文華秀麗集・菅家文章・菅家後集——岩波日本古典文学大系69・72 ○本朝文粹(久遠寺蔵本)——注(5) 文献○朝野群載・本朝統文粹——新訂国史大系第29巻上・下 増補国史

なお、用例を検索する際、索引の存する文献については、それを利用した。

(7) 観智院本『類聚名義抄』、三巻本『色葉字類抄』によれば、「経」「歴」「逕」の諸字には「フ」訓はあるが「オクル」訓はなく、一方の「送」字には「オクル」訓はあるが「フ」訓はない。したがって、前者を「フ」の表記漢字、後者を「オクル」の表記漢字と認めて、以下の論を進めた。

(8) 『枕草子』における「時間の経過」を表すと見られる「オクル」の一例とは、次の用例である。

③「もろこしの御門此國のみかをいかはかりて此國打とらんとつねに心みあらかひをしてをくり給けるに(能因本『枕草子』第二三五段)社は)

田中重太郎『校本枕草子(上巻・下巻)』(昭28、31、古典文庫)によれば、この「をくり」の部分は、三巻本では「をそり」となっている。この文脈は、「唐土の帝が、この日本の国の帝を何とかだましてこの国を討ち取ろうと思つて、いつも、知

恵試しをし掛け事をして「をくり／をそり」なさるのであるが、の如くであろうと考えられるので、「をそり(恐)」であると
するのは、その主体が日本を征服しようと考えている唐土の帝であることより、不自然であろう。ただし、もし仮りに、「を
くり(送)」の方が正しい形であったとしても、その解釈には、少なくとも次の二つの考え方が可能であろうと思われる。
1、(知恵試しや掛け事を持ちかけて日々を)過ごす。
2、(知恵試しや掛け事をするための難題を)寄越す。
したがって、これを「時間の経過」を表す「オクル」の用例と認めることができるかどうかについては、なお検討の余地があ
るように思われる。

(9) 例えば、奈良時代におけるもう一つの「時間の経過」を表す「オクル」の用例は、次の例である。

④奉別以来、經數日、戀念堪多、但然當此節、攝玉鉢耶可、但下民僧正美者、蒙恩光送日如常、但願云、可日玉面參向奉仕耶、
〔寧楽遺文〕僧正美狀、天平寶字六年閏十二月二日

この用例の場合、比喩(擬人法)的な意味で用いていることを示す徴徳は、特に認められないが、逆に、「オクル」自体が「時
を過ごす」という意味を表していることを積極的に示す手懸りも、これと比べて認められない。結局、このような例(ほとん
どの用例がそうであるが)は、判別不能の用例とせざるを得ないのである。

(10) 池田龜鑑『源氏物語大成第一―三卷(校異篇)』(昭28―29、中央公論社)、日本古典文学大系14―18『源氏物語一―五』(昭
33―38、岩波書店)によれば、異同なし。

(11) テキストは、源氏物語古注集成1『松永本花鳥餘情』(昭53、桜楓社)を用いた。

(12) この箇所は、『白氏文集』巻第十六の「官舎閑題」と題する詩の一節であって、その全文は、小論中に用例②として示した
通りである。

今問題となっている「送春」部分について、白居易著・朱金城箋校『白居易集箋校(一―六)』(上海古籍出版社)を検するに、
異同なし。

(13) 観智院本『類聚名義抄』、三巻本『色葉字類抄』によれば、「オクル」と訓読し得る漢字は、「送」字以外にも数多く存して
いるのであるが、我が国における「時間の経過」を表す「オクル」は、今回調査した限りにおいては、いずれも「送」字で表
記されているので、その出自を求めるに際しても、まずは、「送」字に注目して調査することが有効であろうと思われる。

(14) 本文は、以下のものを用いた。

○小川本願經四分律——大坪併治「小川本願經四分律古点」〔訓点語と訓点資料〕9輯、昭33・1) ○西大寺本金光明最勝王

「時間の経過」を表す「オクル(送)」の成立について

經——春日政治『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』(昭44、勉誠社)○知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓——築島裕「知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓古点」(『訓点語と訓点資料』4輯、昭30・5)○東大寺蔵地藏十輪經——石山寺本法華經玄贊——石山寺蔵大唐西域記——中田祝夫「古点本の国語学的研究(訳文篇)」(昭29、勉誠社)○石山寺蔵佛説太子須陀摩經——小林芳規・松本光隆・鈴木恵「石山寺蔵佛説太子須陀摩經平安中期点」(『訓点語と訓点資料』71・72輯合併号、昭59・5)○石山寺蔵沙弥十戒威儀經——小林芳規「角筆文献の国語学的研究」(昭62、汲古書院)○西大寺本不空羼索神呪心經——小林芳規「西大寺本不空羼索神呪心經寛徳点の研究——釈文と索引」(『国語学』33集、昭33・6)○天理大学図書館・国立京都博物館蔵南海寄帰内法伝・龍光院蔵妙法蓮華經——大坪併治「訓点資料の研究」(昭43、風間書房)○兜木正亨師蔵無量義經——兜木正亨・中田祝夫「無量義經古点」(昭54、勉誠社)○高山寺蔵大毗盧遮那成佛經疏——高山寺資料叢書「高山寺古訓点資料第三」(昭61、東京大学出版会)○興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝——築島裕「興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究(訳文篇)」(昭40、東京大学出版会)○前田本冥報記——尊経閣叢刊「冥報記」(昭12、前田育徳財団)○広島大学蔵八字文殊儀軌——井上親雄「広島大学蔵八字文殊儀軌古点——本文・校異・訳文——」(『訓点語と訓点資料』39輯、昭43・10)

(15) 資料には、以下のものを用いた。

〈経書・史書〉○周易・尚書・毛詩・周礼・儀礼・礼記・春秋左伝・春秋公羊伝・春秋穀梁伝・論語・孝経・爾雅・孟子——重栞宋本『十三経注疏』(芸文印書館印行)○漢書・後漢書・史記——和刻本正史(汲古書院)〈漢詩・唐詩〉○佐久節「漢詩大観(一〜八)」(昭18、井田書店)○彭定求等奉勅撰「全唐詩(一〜十二)」(中華書局)

(16) このような意味変化は、国広哲弥「意味論の方法」(昭57、大修館書店)に説かれる「比喩的転用」の「基本的比喩」に相当するものと考えられる。この「基本的比喩」については、上掲書において、次のように説明されている。

○基本的比喩はたとえ英語の動詞 *strike* の「打撃を与える」から「印象を与える」が生じる場合である。「打撃を与える」の最上位には「物理的出来事」のような特徴があると考えられるが、その代わりに「心理的出来事」がはいり、残りの共通部分は「衝撃を与える」のようなものであると考えられる。(第3章多義と同音異義、4多義の意味関係、119頁)

右の説明を「オクル(送)」の場合に当てはめて考えるならば、次の如くなる。すなわち、共通部分として「去り行くものを見送る」といった意義特徴が存し、最上位にある「人物に対する作用」が、「抽象概念(時間)に対する作用」に置き換えられたことよって、「時間の経過」を表す「オクル」が生じたと理解することができる。

(17) 語形自体は和文と漢文訓読文とに共通して見られるものの、その意味・用法に差異の認められる場合が存することについて

は、すでに、次掲の先学等において指摘がなされている。

大野晋「現時点から見た源氏物語注釈の問題」(『国文学解釈と鑑賞』別冊「源氏物語をどう読むか」昭61・4)。西田隆政「漢文訓読と中古国語——「かうぶる」と「かくく」をめぐって——」(『訓点語と訓点資料』78輯、昭62・10)。同「中古国語の訓読表現——「にちかし」の用法をめぐって——」(『訓点語と訓点資料』81輯、昭63・11)。

〔付記〕 本稿は、第十六回鎌倉時代語研究会夏期研究集会での口頭発表を基にまとめたものである。鎌倉時代語研究会の席上では、小林芳規先生より貴重な御教示を賜わった。また、稿を成すに当たっては、小林芳規先生、山本真吾氏に懇切な御指導を賜わった。ここに記して心より御礼申し上げる。